

コンケン大学での居候生活 (1)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

本報では定年退職後、12年間のチェンマイ大学での滞在を終え、2020年10月初めからコンケン大学に移籍し、新しい職場としての生活を迎えることになったいきさつを記述する。1年ごとの契約更改でこれほど長期に亘ってチェンマイ大学にお世話になろうとは思ってしなかつたが、幸いにも永きにわたり、滞在の機会を頂き、多くの経験をすることができた。おそらくこのような永きにわたりアジアの大学に籍を置いた大学人は少ないのではないかとよく言われる。1年ごとの契約更改であるから、来年はもしかしてお払い箱になるかも知れないとの判断が働き、タイ語は全くできない。日常生活においてわずかな日常会話程度しかできない。というよりはいくらか聞き取りができる程度である。今振り返ると、タイ語の学習の必要性は認識して居たが、来年も居残りができる保証はない。また当初は学生に英語力を付けると言うのが役割分担の一つであったから、英語で十分過ごせると言った甘い認識もあった。逢う人の殆どが10年以上もタイに居てタイ語ができないなんて・・・と驚かれることが多いが、真実であるから致し方ない。最初の学部長の招聘でチェンマイ大学に赴任させて頂いたが、その学部長の任期2期目の4年、次の学部長の任期8年の総計12年を過ごさせて頂いた事になる。

きっかけは三重大学在職時代に立ち上げた2つの国際交流プログラムに対するチェンマイ大学側からの高い評価と感謝、またそれらプログラムの更なる進展に対する支援協力がその背景にあった。1つは3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムで、三重大学とタイのチェンマイ大学、中国の江蘇大学の3大学が、毎年順番でホスト大学を勤め、グローバル・テトラレンマ(地球規模の4重苦、**Global tetralemma**)である人口・食料・エネルギー・環境の課題に対して如何に対応するかと言う課題について、参加学生の個々、あるいはグループで考え、その最適解決法を探し、提案・発表すると言うものである。毎年の開催実施で創設時の1994年以来26年を昨年(2019年、10月)迎えた。この4つの地球規模の課題は単にそれぞれの課題を取り上げ並べたものではなく、人類生存と自然のエコロジーと経済とのバランスを如何に維持しつつ経済開発を進めるかと言う、今で言う持続可能な開発(**Sustainable Development**)の先駆けであった。したがって25年を経た今でもこれらの理念、概念がそれほど古くないところが長期の実施を可能にしたと言えよう。すなわちこの地球規模の4課題の全ての原因は人類の生存維持にあり、その生態系は次のように説明できる。すなわち人口が少ない間は、食料もそれほど必要は無いが、人口が増えると比例的に食料の増産が必要となる。食料生産に関わる人口は世界人口の約20%程と言われる。このことを念頭に食料生産を考えると、簡単に言えば食料生産に関わる1人が自分も含め、世界の5人分の食料生産をしなければならないことになる。人口増にあわせて十分

な食料を生産・供給するには、人力だけでは不可能で機械力などの倍力装置を利用することによる増産が必要となる。機械の導入、利用にはそれを動かすエネルギーが必要となる。しかし、これまでエネルギーの主体は化石燃料（石油）であり、この種の大量消費が大量の炭酸ガスの排出をきたし、この事が地球温暖化などの環境問題を引き起こした。しかし人口が少ない間はこうした問題は生じないが、人口が増えると人類生存のために上記の生態系が壊れ、歪みが生じる。経済と言う概念が入ると、一部の人類の中には、自分たちが必要な量以上に金儲けのために、余計な生産、あるいはそのための開発をする。これが環境破壊につながる。そこでどの程度の量の食料があれば人間一人が1年間生存するのに必要かと言うと、その量は約400kgである。これは食料が何とか足りているか、あるいは増産しなければ成らないかを判断する指標（Index）でもある。したがって「如何に環境に負荷をかけることなく経済活動を継続するか」と言う事が「持続可能な開発」である。言うまでも無く、エネルギーの大量消費が温暖化に大きく影響することから、化石燃料の消費を抑えることが環境問題への解決にも効果を持つ。したがって炭酸ガスの排出が少ない、というよりは排出はあるが、結果的に炭酸ガスの排出量が増えないエネルギー資源と言う観点から、バイオマス資源が注目を浴びているのである。植物は生育時に炭酸ガスを吸収し酸素を排出する。この行程において植物が吸収する炭酸ガスの量は、生物資源（農業では主に食糧資源）の収穫後に排出する炭酸ガスの排出量は生育時に吸収された炭酸ガスの量より常に少ない。このことをカーボン・ニュートラル（Carbon Neutral）というが、バイオマス以外にも炭酸ガス排出量を少なく抑えるエネルギー資源が再生可能エネルギーである。石油のように採掘して利用、燃焼してしまえばそれで終わりというのでは無く、まさに再生が可能なエネルギー資源を指す。資源としての大量生産、タイムリーな供給体制の確立が商業化を阻むと言われているが、ビジネスとして立ち上げが成就したのはユーグレナ（ミドリムシ、Euglena）である。最近では新しいエネルギー資源が発見され、これまでエネルギー輸入国であった国が輸出国に変わりつつある。

在職時代に立ち上げた事業のもう一つは国際インターンシップの立ち上げである。日本国内でインターンシップへの支援が行政からも打ち出されたが、対象は国内企業でのスキルアップを図るのが狙いであった。筆者は当時の日系企業のアジア進出を見るとき、学生がその在学時代からその経験をしておけば、企業にとっても即戦力としての雇用も可能となり、学生自身も自信がつき、他大学の学生との差別化もできると判断し早速始めることにした。タイの工業団地を訪ね、その可能性を探りつつプログラムの理念を熱く説いた。サーズ（SARS）や鳥インフル（Bird flu）などで海外渡航が制限される事もあったが、理念や概念は理解頂き、それなりの評価をもらったが、日本の本社からの了解を得るのがネック（Neck）であった。2006年からタイの大学から2名の学生を受け入れて頂き、三重大学からもタイの日系企業でお世話頂いた。それ以来、昨年（2019）まで長期に亘りその事業は継続してきたが、コロナ禍で今後がどうなるかは定かではない。また最近では企業に2ヶ月ほど滞在して、プログラムを終える形式の受け入れは、少なくなってきたようである。

インターンシップ事業で受け入れ可能な企業が、それなりに仲介機関を通じて受け入れると言う形式に変わってきているようである。また参加学生に将来の就職先としての体験機会を与えるとすることで、海外からの学生受け入れは原則として行わないという企業もある。企業にとってインターンシップ事業で学生を受け入れるに当たり、メリットになる部分が少ないと言うのもその一つである。一人の学生を受け入れると、企業ではそれなりにつきっきりで世話をする要員を準備しなければ成らないこと、それなりに経費も準備し、負担をしなければ成らない。またアルバイトや低賃金労働者としての扱いではなく、インターンシップに特化したプログラムを別途準備する必要がある。さらに事故や傷害に対する責任なども心得ておかねばならない。企業にとって利点となる事の一つは、その事業を通じて企業自身が望む人材を捜し当てることができるかも知れないことである。

この国際インターンシップ事業はタイの6つの大学（チェンマイ、コンケン、カセサート、タマサート、スラナリー工科大学、キングモンクット・ラカバン校）と三重大学との間でMOUを締結し、原則としてタイの大学については1つの大学から1名を受け入れ、事業推進のために当初は受け入れ時の渡航費（10万円）までもホストである三重大学が負担して事業継続に向けた激励宣伝効果を兼ねて実施に臨んだ。実際に国際インターンシップが実現したのは2006年で、以後理系のみならず社会科学系の学生もその枠は広がった。上記2つの国際的プログラムは、立ち上げ初期にはその趣旨を理解する人も多かったが、時の経過と共に本来の趣旨、理念、目的を正しく理解する教員が少なくなり、送り出す側も受け入れ側もシステムティックな事務的処理になり、教員の中にも同様の認識の人が多くなった。また少子化で大学も外部の学生に対するイメージアップ（Image up）のための実績作りに利用されてきた感も拭えない。海外事務所設置を高らかにウェブ（Web）やホームページ（Home page）にアップロードしていても、現実には幽霊事務所と言う例も少なくない。こうした事務所が設置されて実際に機能している事務所は全隊の4割程度と言われる。少子化で学生の入学定員を満たすにも留学生、国際交流事業は別枠での対応で、予算が取りやすい（あるいは付きやすい）と言う点で事業の内容より、予算獲得が目的で常に他の学部へ渡さないと言う方針を執行部はとってきた。立ち上げに携わった人間として、その後の経過を見ていると少々残念である。時代と共に事業内容が変化するのは致し方無いとしても、衰退の方向に向かうのは寂しい。その原因の大きさは国際交流に対する教職員、とりわけリーダー格の教員の理解、認識の差、進展に向けた企画力のなさにある。委員会方式になると、企画メンバーが多く成るほど事業への理解にも質、量、レベルに大きな差が出てくる。極端に言えば、委員はそれほど責任を感じていない。参加学生の選考に際して何の説明もせず、選考後の事前研修やフォローアップも十分でないから、何をすべきかという先が参加学生には見えなくなる。そのうち事業実施にかかる予算の額が増え「こんなに多額の予算を使ってまで、強いてやる必要はない」という雰囲気が高まり事業は衰退し、最終的にポシャる。参加する学生には全く関係なく、事業担当部局の一方的な都合で事業の中止、終焉を決める。予算がつく間は熱心であるが、金の切れ目が事業の終焉となる。

努力して予算を取ってくるのではなく、先人達が立ち上げた事業であるから、未練も責任感も、その意義も理解すること無く、あるいは何をすべきかという事すら分からず、あるいは分かろうと言う努力もせずに、安易に、また簡単に諦めると言うパターンが長期の継続事業の中には見られる。将来の世代を担う人材育成教育と言う観点は微塵もなく、早晩終焉を迎える事業が多いと言われる。そうした時代の変遷の中にあって、上記2つの国際交流事業の立ち上げに対する貢献(?)でチェンマイ大学から招聘頂いた。同時に名誉学位を頂いた。以後12年もの長期間にわたり、悲喜こもごもの異国での滞在生活を体験させて頂いた。学部長の任期満了に伴い、引き際を決心した。しかしコロナ禍で移動が厳しく制限されるなか、短期間の一時帰国にも、出入国時に多量の審査書類の収集、検査の結果を待って前後2週間のホテル滞在、運良く入国できても、帰国後の目的地までの公共交通機関の利用禁止となると、時間と共に多額の金額を所持していなければ、予想される全ての事態に対応できない。となると一時帰国すれば2度とタイに戻る事は不可能となる。かといってビザの有効期限を過ぎて滞在するわけにも行かない。タイに残る理由が無くて滞在することはできない。就職先もそうそう容易に見つかるとは思えない。どうにでもなれという投げやりの気持の反面、じわじわとビザの有効期限が迫ってくる。精神的にも落ち着かない日々を送るなか、有り難いことに、筆者を招聘して頂いた元学部長でもり、副学部長でもあった先生より「貴方には何も言わなかったが、ある大学に移籍するべく可能性をあたってもらっているが、どうだろうか」という有り難い話を聞かされた。「責任有る管理者とはこういう人のことを言うのだ」と感激した。ここに至る迄に広げたネットワークを考えれば、その気になって求職活動もできないわけではない。しかしここは人として慎重に、またこれまでの経緯をよく見て、恥ずかしくない行動を取りたいと言う気持ちが優先して浮上してきた。お世話になった人や相手機関に対する感謝と配慮を忘れて、軽はずみな求人行動をすれば、これまで蓄積してきた関係は全てご破算として消える。自分とはもかく私利私欲の為に人を裏切る、組織を利用する、礼を欠く行動・行為は筆者が最も嫌うところである。やむなく日本に帰国しなければ成らない最悪の事態に遭遇してもそれを甘んじて受け入れる覚悟をしていた。しかし自分の知らないところで密かに自分の将来を暖かく考えてくれていた人がいたことは驚きであり、感謝の表現の言葉が見当たらなかった。コンケン大学は既述の上記2つの事業にも深く関わりがあり、3大学事業にも参加してきたし、国際インターンシップ事業の実施協定に調印した6つの大学の一つでもある。前学長も、元学長も学部長の時代からの旧知の間でもある。受け入れた博士課程の学生は、帰国後、同大学で今も教員として教鞭を執っている。しかし学生や知人など、他人のことならともかく、自分自身の事を依頼することは余程の事情が背景に無い限りしないし、したくない、というのが筆者の基本姿勢である。幸いにして1名の欠員があり、学部長の高次の判断も反映し移籍が実現した。学部長もかつての3大学事業に参加したひとりであるが、だからといって全てがフリーパスと言う事は決してない。この年になっても採用にはそれなりのプロセスがあり、この手順を抜きにして事は進まない。CV (Curriculum

Vitae いわゆる履歴書)、学位保有証明書、健康診断書、プレゼン、面接など一連の手順を経て、給与、手当、TOR (Terms of Reference、雇用後に負担する職務の内容と時間を示したもの)、住居、交通費、保険などが明示される。合意が可能であれば契約書に署名する。雇用期間は基本的に1年ごとの契約更新であるが、必ずしも自動的延長の保証はない。その都度1年間の実績をまとめて提出し、評価に値すると判断されれば契約更新となる。評価の基準は、上記TOR (Terms of Reference) に沿った内容の職務について忠実に遂行されているかどうか、が主たる評価基準である。赴任に至る迄は2回ほど相手大学を訪問したが、旅費はチェンマイ大学のお世話頂いた先生が2度とも負担支援して頂いた。まさに心暖まる気配り (Mindful consideration) である。自らが招聘した者に対する処遇対応と言う責任感がなければこうした姿勢は出てこない。リーダーの評価は大学教員としての最高位の職階であることは言うに及ばないが、それ以上に気配りのある管理運営の手腕が大学の進路を決める。四角四面にポストと規則に従う管理運営のみに従うだけでは進展は期待できない。大学をよくすると言う気持ちが真っ先にあることは当然であるが、マインドのないリーダーが重要なポストを譲らない大学はより政治的な管理運営になり、そうした大学に限って執行部が独裁的に予算執行を独占的に、また無駄に使っている。タイの大学はどうかとなるとケース・バイ・ケースであるが、極めて封建的、保守的 (Conservative) な大学が多いのも事実である。長年に亘り学長が決まらず、代行でカバーしている大学が多いこともそれを物語っている(このような例は最近許されず、学長の代行は6ヶ月が最長になったと聞く)。これまでのコンケン大学と筆者の関係は、上記2つの国際交流事業に絡む事項と、かつての学長(複数)との旧知の間柄という人間関係に基づくものであったが、あらためて職場としての新天地で如何に貢献出来るかは別問題である。「ポジティブ思考でベストを尽くす」以外にないと腹をくくって覚悟している。ちなみにチェンマイからコンケンまでの移動(今回は引っ越し)には、ロジスティック (Logistics) で使われる小型トラックの荷台を高く、密閉し、雨天の場合も雨が降り込まない構造にした車での移動であった。時間的に午前3時に搬送荷物を積み込み、4時前にチェンマイを出発、午後14時半にコンケン大学に到着という長距離を走破した。一般に言われている所要時間は8時間ほどと言われているが、途中でトイレ休憩や昼食も採らねばならない。運転手と助手役の運転手の妻と筆者の3名が運転席一杯に乗車し、窮屈な状況の中で長時間のドライブを楽しむ(?)という旅であった。金額は6000バーツであった。チェンマイ出発に際しては研究プロジェクトのスタッフが早朝の3時にわざわざ眠いなか、目をこすりながら出てきて荷物の積み込みを手伝ってくれた。こうしたことも、なかなかできない行為である。本当に有り難いと言うほかに言葉はない。こうしてコンケンでの初日が始まった。当初の予定より1日遅れたこともあって、予定のアパートの宿泊はキャンセルとなり、3日間のホテル泊まりとなった。実際には10月5日から予定されていたアパートに投宿し現在に至っているが、全ての手続きが完了したわけではない。IDの給付のために警察署に向く予定が残っているが、大学からの正式文書の給付が未だできておらず、いつまでかかる

か予定が立たない状況にある。新しい名刺の印刷については原稿はできあがり、本印刷を待つばかりとなった。新しい銀行口座も開設し、そこに大学側からの入金を振り込んで貰う準備もできた。しかし、これまで気がつかなかったが、移籍後はしばしの期間チェンマイで使用していた同じ銀行の別の口座のカードを利用して気がついたことがある。それは口座から金を引き出す度にわずかながら手数料も引かれていることである。聞いてみると、同じ銀行であっても異なる地域で開いた口座からの引き出しには手数料を取られるという事であった。新しく開設したコンケンでの口座からの引き出しは手数料は無料と言うことで、面食らった。参考のため記述しておく。



アパート契約した宿舎（左）、本来はホテルでもある。アパート近くの屋台レストラン（右）と筆者のお気に入りの太麺（センヤイ）メニュー（中）を毎夜食している